１４・１５世紀
ノヴゴロド・プスコフ地方における
異教残滓と正教会

（論文要旨）

三浦　清美

本論は 15 世紀後半プスコフ地方で成立した一写本文集に収録されたテキスト『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントを中心に、四つの異なる視点から展開された学術的論考の試みである。テキストを主題とすれば各部において行なわれる論考は主題の変奏と展開に当たる性格を持つものであるが、各部はそれぞれ与えられた視点固有の特性に基づく独立の展開が行なわれているため、個々の有機的な連関性に欠けるかのような印象を与えることがある。

が、こうして展開された各々の部あるいは個々の記述は、『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントというテキストがもつ様々な側面と何らかの結び付きを持っており、一見連関性が希薄と見える個々の部分も、テキスト自体の性格あるいはそれと向き合う学問の諸領域を介して互いの結び付きを確保していることをまずは付記しておきたい。

以上述べた本論の基本的な性格付けと、構成上の配列は、しかしながら、逐語的な一致を伴わない。本論において主題にあたるテキスト『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントに関して集中的な記述が行なわれるのは第２部である。

『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントは現在５つの写本においてそのテキストの存在が確認されている。うち４つまでは今世紀初頭までにロシア文献学の本格的な研究対象となっているが、残り一つは写本自体が研究者によって発見されるのが比較的遅かったこともあり、ロシアでも文献学の研究対象となっていなかった。また、このテキストは二つの極めて優れた先行研究を持っているが、各々の研究は 1913 年 14 年とほぼ同時期に行なわれており、しかも研究者相互の連絡が全くなかったらしく、互いの研究成果を比較対照して補完する作業はこの二人の優れた研究者（アニチコフ、ガリコフスキー）によっては行なわれなかった。テキストは確定されたとみなされ、常に研究者の関心を引き続けてきたが、独立して成立した二つの研究成果を統合する研究成果は以後現在に至るまで現われなかったのである。

本論第２部において行なったのことの一つは、ガリコフスキーとアニチコフの成果と、これにロシア共和国で行なった独自の調査を土台として現存する５つの写本の流れに一つの道筋を付けることであった。

まず最初の研究作業は現存する５つの写本（1)パイーシイ文集(14c) 2)ノヴゴロド・ソフィア写本(15c) 3)キリル・ベロゼルスキー写本(16c) 4)チュードフ写本(15c) 5)文集

『ズラタヤ・マチッツァ』(15c)写本に存在する個々のテキスト間の異同を調べ、タイポロジー的な分析を行なうことであった。その結果、次のようなことが分かった。

5つのテキストのうち内容的な著しい接近を見せるのは 4)・5)のみであり、残りのテキストは何らかの内容的な異同を含んでいる。テキスト 4)と 5)に見られるテキストの偏差はおそらくは写字生の書き癖に由来すると思われる（例えば、eをьと表記するなど）。一方、残りのテキスト群と内容的に明らかな相違をもつテキストが 1)である。その最たる点は、他のテキストが多かれ少なかれ異教起源のロシアの民衆儀礼を糾弾する箇所をもっていたのに対し、このテキストだけが上記の挿入箇所を持っていないこと、ほかにも、言語的特徴が指し示す写本の成立年代などが、この写本に収容されたテキストが年代的に最も古く、ギリシア語原典に近いことを裏付けている。

しかしながら、このパイーシイ写本のテキストでさえギリシア語原典に含まれ t 文言を多く含むのである。その典型的な例は異教としてイスラムの風習を糾弾する内容の文言である。4 世紀のキリスト教教父金口イオアンがいくら博学であったとしてもイスラム教について知っていたはずはないからである。ギリシア語原典と比較すればほかにも多くの挿入箇所が認められる。ガリコフスキーはこの講話の表題「注釈に見いだされる」という文言から南スラヴ起源の注釈本がテキスト成立に介在している可能性を示唆した。一方、アニチコフは独立して、11 世紀の羊皮紙の写本の中にすでに古代ブルガリア語訳の『聖グリゴーリイ講話』があり、本テキストに対応する箇所が早くも 11 世紀にルーシに知られていたこと、また、14 世紀の写本の中にもほぼ同じテキストが見いだされることから、この古代ブルガリア語テキストがパイーシイ写本以下ロシア・ヴァリアントの成立に関わっていた可能性を示唆した。ただし、さらに詳しい内容の検討から、これが直接関与したかどうかを筆者は疑問とせざるを得なかった。

いずれにせよ、南スラヴ語の翻訳か注釈がロシア・ヴァリアント成立に関与したことは間違いがない。そして、テキスト 2)末尾に見られる文言からこの南スラヴ系テキストからの翻訳・筆写・創作の諸作業がアトス山への巡礼途上で行なわれたことが分かる。同一の内容がさらに古い起源を持つはずの 1)写本には見いだされないことは、巡礼途上でこのロシア・ヴァリアントが成立したことを否定する材料にはなりえない。というのは、写本 1)においては写本 2)に見られる具体性に富んだ記述がキリスト教教会文学のトポスに置き変わっており、中世ロシアのキリスト教文学が常に個別性・具体性から普遍・一般性の方向へ流れる指向を持っていることを考慮にいれると、巡礼途上での筆写を示唆する文言を創作と片付けることはできないからである。むしろ、このことは二つの共通の源泉となった原テキスト（アトス巡礼の記述を含む）の存在を示唆するものである。

さらにガリコフスキーはプスコフ起源の別のテキスト『金口イオアン講話』がテキスト 2)・4)・5)の成立に果たした極めて大きな役割を指摘している。ロシア固有の民衆的な風習についての多くの記述はこのテキストから引用されている。さらに、このテキストを収容した写本ノヴゴロド・ソフィア 1262 番の来歴を記したカリンスキーの考察から

『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントの成立年代の同定が許される。

このテキストは唯一前述の写本のみに現存し、言語的な特徴からプスコフ起源が明らかである。さらに、この写本は15世紀前半にはすでにノヴゴロドにわたり、ヴィアジシ修道院の所有になった。このことから、『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアント（4)・5)）はプスコフ地方ですでに15世紀前半しかもかなり早い時期に成立し、一方、ノヴゴロドにわたった写本ノヴゴロド・ソフィア1262番は彼の地で2)ノヴゴロド・ヴァリアントのテキスト成立に関与したと考えられる。

このようにギリシアから南スラヴを経由して北東ルーシに達し、この場所で異教起源の民衆的な風習の挙げつらいとそれに対する厳しい論難が挿入されることになったテキスト『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントはどのような歴史的背景を背負って形成されるに至ったのか、北東ルーシあるいはロシアの政治的・教会史的な側面からこの問題を検討したのが第3部である。

モスクワとトヴェーリの抗争への考究を通じて、モスクワの勃興がヴィザンツとの関係において北東ルーシの歴史における分節点となったことを、数次に及ぶトヴェーリの政治的暴走とモスクワの着実な伸張政策の比較から導きだした。

さらに、モスクワの着実な発展の具体的な内容を、ラドネジのセルゲイら集住式修道院の設立に伴う辺地の開拓運動と、さらにこれと平行して、しかし、ほぼ独立して行なわれたモスクワ府主教独自の努力による開拓運動に求め、これらロシア正教会が主宰した開拓運動がモスクワ公国の潜在的な支配領域の拡大に大きな役割を果たしたことを指摘した。

また、こうした正教会主導の辺地の開拓事業は住民の実質的なキリスト教をもたらした。『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントの成立もこうした流れの中に位置づけることができる。修道院が辺地にむかうに伴って、キリスト教修道士たちは異教的風習を色濃く残す民衆とはじめて遭遇したのであり、彼らの生活を実見し、異教起源の風習が根深さをもつ由縁を考察の対象として自らの著作に取り込んだ。その現われが、従来の異教糾弾を旨とする説教という伝統的なジャンルに拠って執筆された『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントである。従って、ここで私達は表向きの非難という執筆者の立場に引きづられることなく、むしろ文学史的な知識に鑑みながら、執筆者が異教的な風習を見つめる冷静な姿の本質的な新しさに注目しなくてはならない。こうした着眼に必要な中世文学に固有の文学的な環境に対する概観は第4部で行なった。

『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントの成立もこうした全ロシア的な潮流のなかに存在することは確かであるが、このことはなぜ他でもなくプスコフでそれが成立したかを説明する根拠にはならない。実際プスコフには地付きの宗教に対して特別に攻撃的な態度をとる必要が存在したのである。

プスコフはロシア正教会領域の辺境に位置したため住民の実質的な改宗がほとんど進んでいなかった。また、カトリック勢力の間断ない攻撃にさらされたばかりではなく、

14 世紀末まで異教を信奉し続けた大国リトアニアを隣人に持ち、深い関係を結んでいたこともあり、極めて異教的な雰囲気の強い環境にあった。このように異教の侵入やカトリックの浸透に特別な配慮が払われるべきプスコフに対してロシア正教会中枢部は冷淡な対応しか行わなかった。経済的・政治的な理由からプスコフに主教座の設置を認めなかったのである。この結果、プスコフの教会社会は手の付けられぬ混乱に陥った。

こうした混乱に対処すべく自主的に修道院創設運動が組織され、その逆境において反動として特別強固な護教的精神が発達した。『聖グリゴーリイ講話』プスコフ・ヴァリアントはまさにこうした環境の只中から生まれでた。護教精神の強さの余り現実を見つめる冷静さを失うこともなく、さきに述べたように民衆の習俗に対して現実的な視点を持ち続けた。このことは正教会・キリスト教が民衆へ実質的に浸透することを用意したものとして特筆すべき事件ということができた。

以上のようなテキストに基づく考察を理論的に支えるものとして第一部でキリスト教という宗教に関して、ヘブライズム、ヘレニズム、伝統社会などヨーロッパ諸思想の歴史的展望から、その独自性の検討を行なった。

神話間の競合の中で最終的にキリスト教が残っていった理由として本論で特に着眼したのは神話の体系性の堅固さであった。キリスト教の独自性は、一神教でありながら要素としてならば他の宗教起源の諸要素を排除することなく逆にそれを自らの体系に組み込む間口の広さにある。こうして、復活というイマゴにより伝統社会のもつ循環論的な感覚を取り入れたことを通じ、キリスト教は多くの人々の支持を得るに至ったと考えた。こうした吸引のプロセスによりパレスチナでうまれた宗教はヨーロッパ固有のものとして再生したと考えられる。

伝統社会とキリスト教との遭遇が両者に与えた“トラウマ（傷）”という問題は具体的な例を子細に検討することを通じてより説得力ある結果へ導くことができたと思われるが、本論では残念ながら論考はそこに及んでいない。期して将来の課題としたい。